

平成30年度 文学講演会

主催：公益社団法人 上伊那教育会

- | | | | |
|---|-----|---|-------------|
| 1 | 日 時 | 10月20日(土) | 14:00~16:00 |
| 2 | 講 師 | 堀井 正子 先生 | (近代文学研究家) |
| 3 | 演 題 | 宮澤賢治、妹を求めての旅 「Ora Ora de shitori egumo」 | |

『堀井正子 先生 プロフィール』

千葉県生まれ 東京教育大学文学部卒業
高校教員。短大、長野高専、信州大学、中国の武漢大学等で講師を務める。

現在、県カルチャーセンター、八十二文化財団教養講座の講師、信越放送ラジオ「武田徹のつれづれ散歩道」にレギュラー出演中。信濃毎日新聞「クレソン」の「ことばのしおり」の執筆等を担当。

主な著書に「ふるさとはありがたきかな—女優松井須磨子」「戸隠の絵本」「源氏物語 おんなたちの世界」「ことばのしおり」「ことばのしおり 其の弐」「出会いの寺 善光寺」などがある。

現在 長野市在住



【教育会長挨拶】

飯澤 隆 上伊那教育会長

朝晩は大分ひんやりとする気候となつてまいりました。この冷涼さのお陰で山々の紅葉が始まり、秋の深まりを感じる季節となりました。本日は、公益社団法人上伊那教育会主催の「文学講演会」に、会員の皆さんをはじめ地域の皆様にも多数お集まりいただき、誠にありがとうございます。

この「文学講演会」は、「哲学研修」「授業研修」と並び、上伊那教育会の三大研修とよばれている事業です。価値ある文学作品の読み合わせを通して、自らを見つめ直す良い機会となっております。また、公益事業としても大変重要な研修として位置づけ、毎年継続しております。

その作品の書かれた時代背景や作者の生き様などを手繰りながら読み深めることで、自分の振り返りをする研修。それは、文学の登場人物や作者の生き様を通して「他者と出会う」ための本当に貴重な時間となっていると思います。

さて、文学読み合わせの講師に、東春近公民館館長、元高遠中学校校長、野溝和人先生をお願いし、ご指導をいただいています。先生は、会員の思いを大切にされ、より親しみやすく、興味をもって学べるようにと、新しい文学研修の形を作ってくださいました。「芥川賞と現代作家たち（その3） ぶらり芥川賞作品読み歩き」と題して、身近で魅力的な、芥川賞を受賞した作品を取り上げられ、合計5回の読みあわせで、毎回懇切丁寧に、また的確なご指導をいただいております。心より感謝申し上げます。

そして、本日は、近代文学研究家、堀井正子先生に、「宮澤賢治、妹を求めての旅『Ora Ora de shitori egumo〜』」と題してご講演を賜ります。よろしくお願いたします。先生のご紹介につきましては、この後、小澤研修部長がさせていただきますが、ご存知のように、信越放送の「武田 徹のつれづれ散歩道 近代青春グラフィティ」のレギュラーパーソナリティとして出演されています。武田徹さんとの絶妙な掛け合いのなかで、先生の上品でステキな語りと、優しい笑い声に、思わず聞きほれてしまいます。今日も長野でラジオ番組を収録されてからこの会場にお越しいただきました。本日はよろしくお願いたします。

それでは、参会者の皆様、ご静聴のほどよろしくお願いたします。

<講演内容の概要>

○『春と修羅』の中の「永訣の朝」は、賢治の妹トシが亡くなっていく日に書かれたものである。賢治は、妹と一緒に死んでほしいと言われれば本当に一緒に行くような人であった。括弧で書かれている例えば（あめゆじゅとてちてけんじゃ）という言葉は、妹の声なのだが、賢治の頭の中の声でもある。

○「無声慟哭」は、妹の死を嘆いた詩である。兄の暗い顔を見ると、妹が、自分がおっかない顔をしているのかを心配するなど、妹が遺される賢治のことを全力で心配していることがわかる詩である。

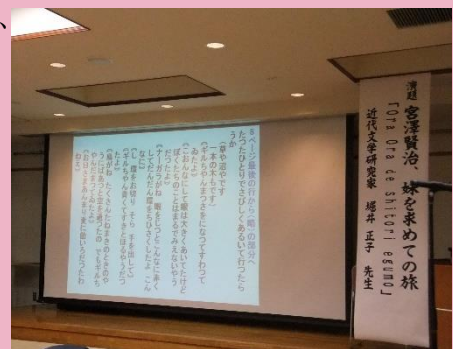
○「(Ora Ora de Shitori Egumo) の記述は、妹の言葉をそのまま遺したいがため、ローマ字表記としている。賢治は、この言葉を、死にゆく妹の「私は一人で死んでいきます。」という声として表現したのに対し、若竹千佐子さんの「おらおらでひとりいぐも」では、「私は一人で生きていくよ。」という使い方をしている。



- 妹が死んで、どこの世界に行ったのかをずっと考えていた賢治。賢治は日蓮宗の宗教家であった。そのためか、妹が亡くなってから七ヶ月も詩が書けていない。翌年ようやく「青森挽歌」を書く。ここでも「松の針」と同様、詩の行を下げたり上げたりする感覚で、賢治の頭の中の意識の層を現している。そこは、若竹千佐子さんの「おらおらでひとぐも」の中に出てくる「柔毛突起」と同じである。
- 最後の一瞬まで妹と一緒にいられなかったという思いを込めて、何度も何度も書き直した末に、「銀河鉄道の夜」を完成させた。銀河鉄道は、四次元を移動できるジョバンニとカンパネラという二人の親友が登場する。タイタニック号沈没の時の人が銀河鉄道に乗るなど、人のために命を落とした人が乗る鉄道である。

<参加者の感想>

- 自分の内より沸き上がる“柔毛突起”の声は言い得て妙で、うまく言葉に表せない複雑な思いをうまく言い表されていると思う。「銀河鉄道の夜」に見る宗教観、賢治の妹への思いの詩、堀井先生のご講演は実に目からウロコの思いで拝聴した。素敵なお講演ありがとうございました。
- お人柄の伝わる優しい穏やかな声で、宮澤賢治の世界に浸らせていただきました。妹を思う宮澤賢治の切ない心やその思いを、言葉で、文で表現した貴重な作品に出会わせていただきました。小学校でも作品を子どもたちと読む機会が多くあるので、今日教えていただいたこと、感じたことを子どもたちに伝えていきたいです。ありがとうございました。
- 日頃、なかなかこのような文学作品や作家と向き合う機会がつかれずにいるのですが、知的好奇心を大いに刺激していただきました。賢治の詩の一節に込められているとし子の思い、それを受け止めきれない賢治。そして、その思いが後の創作へとつながり、時を経て新たな意味を持って早成の最後に再び脚光を浴びる壮大な流れを感じました。素敵な時間をありがとうございました。
- 宮澤賢治の作品は、興味がありいくつも読んだことがありますが、今回、堀井先生のご講演を伺い、もう一度読み返してみたいという気持ちになりました。妹のとし子の死が、「永訣の朝」に始まり、それ以降の賢治の創作活動に大きな影響を与えたこと、それは「銀河鉄道の夜」にも続いていったことなど、新たな視点から賢治の作品を見ることができ、とても新鮮でした。ありがとうございました。
- 宮澤賢治の作品は有名で、私も「おら、おらで、ひとり、いぐも」は、中学生の頃授業で扱われたのを思い出しました。でも授業では「永訣の朝」しか読まなかったので、この作品にはこんな奥深い互いを思いやる気持ちを表現した物語ということは、知りませんでした。また、講師の堀井先生の優しい語り方が、作品の中へ登場人物たちの心情に寄り添いながら読み合わせさせていただくことができました。心に残るご講演をしていただき、ありがとうございました。



【お礼の言葉】

林 武司 上伊那教育会副会長

堀井先生ありがとうございました。

先生の深いお話に対して、理解の浅い私がお礼を申しあげるのは失礼だと思いますが、感じたことを話させていただきます。

本当にあっという間に時間が過ぎてしまったという印象です。優しい語り口で私たちを文学の世界に引き込んでくださり、まさに堀井先生の世界に引き込まれた、そんな時間であったと感じています。

同じ言葉が、生きている側の人にとっての決意の言葉となり、死んでいく側の人へ向く決意の言葉になる。

言葉の持つそんな意味について最初お話しされて、これはすごいなと思いながら拝聴したのですが、その後さらに先生のお話を聞いていく中で、そこだけではないんだと思いました。賢治と妹さんの最後の場面で、賢治は言葉をかけたくてもかけられなかった。妹さんに言葉をかけたいたんだけど、言葉が出てこない。言葉っていうのは、使うとか使わないとかということだけではなくて、もっともっと深い、奥深いものなんだなということを改めて思います。言葉をかけたけれどもかけられないまま、妹さんを悲しませたまま、逝かせてしまった賢治。そんな賢治は、「Ora Ora de Shitori egumo（おらおらでひとりいぐも）」と言わざるを得ない状況に、妹さんが追い込んでしまった。妹さんを独りで逝かせてしまった。賢治はその思いを言葉で表現することはできず、しばらくの間何も書けなかった。しかし時間が経つにつれ、その気持ちを詩で表現し、最後は「銀河鉄道の夜」という作品で表現した。賢治自身が自分の思いをたどり直しながら言葉として、作品として綴ったということ。その「人」にとっての言葉、「作者」にとっての文学、その持つ意味の重さを深く考えさせられました。

堀井先生が、「すごく好きな作家のことを語るのはとても語りにくい」っておっしゃいましたが、私たちはこうして今日、堀井先生の大好きな宮澤賢治の話を、ここでみんなでお聞きできたということ、その喜びに感謝したいと思います。先生、これからもたくさんの人に文学というものの奥深さ、そして素晴らしさを語っていただきたいと思います。素敵な時間をすごさせていただいたことに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

